

2018年度

公益財団法人 高柳健次郎財団

高柳健次郎賞・研究奨励賞・科学放送高柳賞



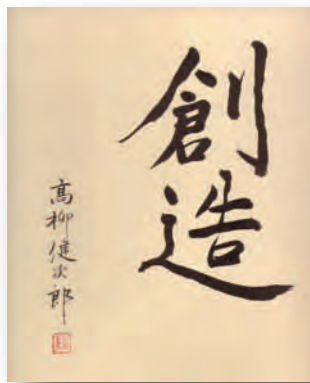
恒に夢を持つこと
志をすてず”
難きにつく

昭和38年1月3日

高柳健次郎



高柳健次郎 書齋にて



よい科学者、
よい技術者である
まことによい人間であれ
高柳健次郎

公益財団法人 高柳健次郎財団

設立

故高柳健次郎氏が文化勲章の授章に際して、「決して私一人の力で成しえたことではありません」と謙虚に述べ、「初期の研究過程において、研究費の不足に困ったとき助けられた有難さを今も忘れることがない」と感謝の気持ちを表している。そして、これまでに多くの方々から受けたご恩に報い、併せてわが国の電子科学技術の振興に些かなりとも貢献できればと念願し、設立されました。



高柳健次郎の功績 「世界で初めてブラウン管による電子表示に成功」

高柳健次郎博士は、電子式テレビジョンの実現を目指して研究し、1926年12月25日に世界で初めてブラウン管を用いて電子映像表示に成功した。

当時、イギリスでは、1925年にベアードが送受信ともニポーの回転円板を用る機械式テレビジョンの実験に成功、翌年には機械式テレビジョンの公開実験を行っていた。他方、米国、欧州各国などでもテレビジョンの実現に向けた様々な試みが行われていた。

高柳は、機械式では精細な画像表示ができないと判断して、映像を電子的に撮像・表示する電子式テレビジョン技術の開拓に挑戦し、浜松高等工業学校で研究を進めた。1924年12月に電子表示のために独自に開拓した熱陰極ブラウン管の試作を芝浦電気(株)(現東芝)に依頼した。撮像はニポーの円盤で画像を走査し、高速電子回路を開拓して電子映像を作った。1926年12月25日、雲母板上に書いた「イ」の字を、世界で初めてブラウン管上に電子的に表示することに成功した。時あたかも大正天皇が崩御され、その号外新聞発刊の鈴の音を聞きながらであった。こうして、世界初の電子式テレビジョン受像器を実現、それはまた、世界初の電子映像表示装置(ディスプレイ)の達成であった。高柳は1927年には真空管式の撮像管の特許出願を行うなど、その後は電子式テレビジョン放送の実現・発展に貢献した。

他方、アメリカでは、1927年、フィロ・フランスワースが電子式テレビジョンの特許を申請し、1933年にツボルキンがアイコノスコープ(撮像管)を発明し、受像には高柳が達成したブラウン管方式が用いられて、電子式テレビジョンが開拓されていった。

現在、高柳が開拓した電子映像ディスプレイは、テレビジョンの映像表示のみならず、電子機器の発展につれて「人間と機械の対話装置」へと発展し、パソコンやスマートフォンなどの情報通信端末のキーテクノロジーに進化し、現在の情報通信技術社会の発展を支えている。



「イ」の字の表示に用いられたブラウン管

● 目的・事業

当法人は、電子科学技術に関する独創的な研究開発に対し研究助成を行い、また優れた研究業績者を表彰することにより、わが国の科学技術の振興に寄与し、豊かな社会の創造に貢献することを目的としています。その目的を達成するため、下記の事業を行っています。



理事長 末松安晴

〈 高柳健次郎賞 〉

電子科学技術に関する優れた研究により、わが国のこの分野の振興並びに産業の発展に貢献された方々の功績に報い、電子科学技術の更なる発展とその啓蒙に寄与することを目的とした賞です。

- 高柳健次郎賞 1件 表彰盾並びに記念のメダルを贈呈
- 高柳健次郎業績賞 2件 表彰盾並びに副賞として賞金を贈呈

〈 研究奨励賞 〉

将来の発展が期待される独創的な研究に取り組む若い研究者に助成し、わが国の電子科学技術の振興並びに産業の発展に寄与することを目的としています。

- 研究奨励賞 3名～5名 表彰盾並びに副賞として研究助成金を贈呈

〈 科学放送高柳賞 〉

科学技術の振興とその知識の向上に役立つ優れた科学放送番組を奨励し、番組内容の向上に寄与することを目的とした賞です。優れた科学放送番組を放送した放送局を表彰しています。

- 最優秀賞 1件 表彰盾を贈呈
- 優秀賞 2件 表彰盾を贈呈

〈 未来技術フォーラム 〉

電子科学技術の分野で次世代の発展に寄与する最先端の技術や話題をテーマに、年3回開催しています。但し、本年度は休止いたします。

〈設立許可〉

- 1984年(昭和59年) 10月31日 内閣総理大臣・国務大臣科学技術長官より、民法第34条の規定に基づく公益法人として許可を受く。
- 2010年(平成22年) 3月29日 内閣総理大臣より、公益法人認定法第44条の規定に基づく公益財団法人として認定される。
- 2010年(平成22年) 4月 1日 公益財団法人高柳記念電子科学振興財団として法人登記。
- 2011年(平成23年) 5月19日 公益財団法人高柳記念財団へ名称変更。
- 2013年(平成25年) 6月 5日 公益財団法人高柳健次郎財団へ名称変更。

受賞発表

高柳健次郎賞

研究奨励賞

科学放送高柳賞

2018年度 高柳健次郎賞・研究奨励賞・科学放送高柳賞 受賞者

〈贈呈式〉2019年1月18日(金) 千代田放送会館 2Fホール

高柳健次郎賞	<p>吉野 武彦氏 <研究業績> ISDB(統合デジタル放送)の研究開発および実用化への貢献</p>
高柳健次郎 業績賞	<p>高村 誠之氏 <研究業績> 映像圧縮符号化方式の先駆的研究とその国際標準化および普及活動</p>
研究奨励賞	<p>相澤 直矢氏 <研究課題> 多層構造を有する高効率塗布型有機EL素子の開発</p>
	<p>角江 崇氏 <研究課題> コンピュータホログラフィによる超高分解能4次元計測システム</p>
	<p>安田 充氏 <研究課題> ナノ薄膜干渉基板を用いたカビの蛍光増強イメージング法の開発</p>
科学放送高柳賞 最優秀賞	<p>● 番組名 「パラリンピック・ドキュメンタリーシリーズ「WHO I AM」 森井大輝(日本/アルペンスキー)【平昌パラリンピック完全版】」 <放送局> 株式会社 WOWOW</p>
科学放送高柳賞 優秀賞	<p>● 番組名 「衝撃!未来テクノロジー 2030年世界はこう変わる」 <放送局> 株式会社 BSテレビ東京</p>
	<p>● 番組名 「NHKスペシャル シリーズ古代遺跡透視 大ピラミッド発見!謎の巨大空間」 <放送局> 日本放送協会</p>

高柳健次郎賞

「ISDB(統合デジタル放送)の研究開発および実用化への貢献」



吉野 武彦 氏 (元日本放送協会 専務理事・技師長 1943年生)

[学歴]	1966年 3月	早稲田大学工学部電気通信学科	卒業
[職歴]	1966年 4月	日本放送協会	入局
	1986年 7月	日本放送協会	放送技術研究所 衛星方式研究部 主任研究員
	1990年 6月	日本放送協会	テレビ方式研究部長
	1996年 6月	日本放送協会	技術局 計画部長
	1998年 6月	日本放送協会	放送技術研究所長
	1999年 6月	日本放送協会	技術局長
	2000年 9月	日本放送協会	理事・技術局長
	2002年 10月	日本放送協会	専務理事・技師長
	2004年 10月	株式会社NHKアイテック	代表取締役社長

● 主な受賞等

1975年	電子情報通信学会賞米澤記念学術奨励賞	2001年	IEEE Fellow
1984年	市村学術賞・市村産業賞学術の部貢献賞	2006年	前島密賞
1984年	放送文化基金賞技術部門	2016年	日本ITU協会特別功労賞
1992年	東京都発明研究功労表彰	2018年	IEEE Life Fellow
1995年	科学技術功労者顕彰		

〈主な業績内容〉

吉野武彦氏は、1966年に日本放送協会に入局し、1970年から総合技術研究所(当時)においてデジタル技術を用いた新しい放送システムの研究開発を進めてきた。1980年代には、映像・音声など放送するコンテンツの種類に依存した放送システムというそれまでの概念から脱却し、デジタル化された情報を区別せず、あらゆるデジタル信号を統合して一つの放送サービスとして提供するという、統合デジタル放送、ISDB (Integrated Services Digital Broadcasting) を提唱した。デジタル信号を同じ形式で扱うためのパケット化、これらを効率的に区別する識別子の考え方など、まさに現在広く普及しているデジタル放送の基礎を築き上げた。この考え方は、日本からCCIR(国際無線通信諮問委員会)に提案されて研究課題となり、その後のITU-R(国際電気通信連合無線通信部門)において数多くの放送方式が標準化されることとなった。

衛星デジタル放送方式(ISDB-S)は、吉野氏が研究開発を指導していたハイビジョン信号の圧縮方式や高効率な変調方式をベースに、ひとつの衛星中継器で2チャンネルのハイビジョン放送が実現可能な方式として開発されたものである。ISDB-S方式は、1999年にITU-R勧告として標準化され、2000年には国内で衛星デジタル放送が開始された。放送開始時より多くの放送事業者が参入し、「高画質ハイビジョン放送」、「高音質デジタル音声放送」、「多彩なデータ放送」や、それらを統合したサービスなどが提供され、ISDBが提唱するコンテンツの種類に依存しない放送システムがついに実現した。

衛星デジタル放送で吉野氏の提唱したISDBが実現し、伝送方式にそれを具現化する仕組みが導入されたことを受け、その後の地上デジタル放送にも大きな影響を与えた。地上デジタル放送方式(ISDB-T)は、ISDBで提唱された「どこでも放送サービスを楽しめる」という概念を具現化し、固定受信のみならず移動体での携帯受信が可能な方式として開発されたものである。ISDB-T方式は、2000年にITU-R勧告として標準化され、2003年には地上デジタル放送として東名阪から開始され、その後全国に普及した。2018年7月現在、ISDB-Tは日本を含む世界19カ国で採用されている。

吉野氏の業績であるデジタル放送は、高画質なハイビジョンの実現、音声のデジタル化、データの伝送等従来ではできなかったサービスの実現により、電子番組ガイド(EPG)による予約録画機能、データ放送による天気予報やニュースの提供、携帯電話によるワンセグ視聴など、国民視聴者に放送をより便利に楽しんでもらう機能を提供した。吉野氏の長年の研究や実用化への貢献が放送を進化させ、視聴者の皆様に多くのメリットをもたらせたといえよう。

吉野氏が提唱し、衛星デジタル放送で実現させたISDBは、地上デジタル放送を経て、現在の4K8K放送や通信連携サービスなど放送分野はもとより受信機、コンテンツ制作に至る多くの分野にも影響を与え続けている。特に地上デジタル放送では、南米を中心に日本方式の採用が世界に広がるなど、デジタル放送分野で世界的にも大きな影響を与え貢献した。このように、先見性のある研究が、今花開き、日本のみならず世界の放送分野に多大な影響を与えた功績は極めて大きいものである。吉野氏が提唱し実現してきた技術は、これからも様々な分野に活用されるとともに、日本のみならず、世界の放送界に影響を与えながら発展していくであろう。

高柳健次郎業績賞

「映像圧縮符号化方式の先駆的研究と その国際標準化および普及活動」



高村 誠之氏

(NTTメディアインテリジェンス研究所 主幹研究員 上席特別研究員 1968年生)

【学歴】 1996年 3月 東京大学大学院 工学系研究科 電子工学専攻 博士課程修了 博士(工学)
 【職歴】 1996年 4月 日本電信電話株式会社 ヒューマンインタフェース研究所
 2005年 8月 スタンフォード大学 客員研究員(～2006年9月)
 2008年10月 日本電信電話株式会社 メディアインテリジェンス研究所 主幹研究員(～現在)
 2017年 4月 日本電信電話株式会社 上席特別研究員(～現在)

● 主な受賞等

2002年 5月 映像情報メディア学会 丹羽高柳賞論文賞
 2004年 3月 2008年3月、2015年3月 電気通信普及財団賞(テレコムシステム技術賞)
 2006年 5月 情報処理学会 長尾真記念特別賞
 2017年 5月 映像情報メディア学会 丹羽高柳賞業績賞

〈主な業績内容〉

インターネット上の映像コンテンツの流通量は年率31%のペースで急激に増加中であり、映像以外も含む全帯域のうち実に73%を占める。しかもこの割合は2021年には82%に達すると予想されている。現在流通している映像信号は非圧縮サイズの数百分の一程度にまで圧縮されており、映像圧縮技術がなければ世の映像サービスひいては通信サービス一般が破綻することは明白であるし、通信サービスの持続的発展のためには、より効率的な映像圧縮技術の継続的な研究開発が不可欠である。高村誠之氏は、1990年代の大学院在学中より現在に至るまで、一貫して本技術の研究開発とその国際標準化・実用化・普及活動に従事し、精力的に本分野の発展に多大な貢献をしてきた。

標準化: 氏の画面間大域動き予測技術は、最大で符号量を27%削減、客観画質(PSNR)を1.8dB向上させるもので、国際規格MPEG-4に必須認定され、対応LSIを搭載したハンディカム、タブレット等の携帯端末で映像を手軽に長時間楽しむ新しい文化「モバイル・パーソナルコミュニケーション」の契機となった。氏の画面内傾斜予測技術は、最大で符号量を3.0%削減、客観画質を0.45dB向上させるもので、国際規格H.265/HEVCに必須認定され、4Kストリーミング・VODや4Kカメラつきスマートフォン、4K/8Kテレビ放送などに用いられ、2020年には26億個の規格準拠製品が出荷されると予想されている。

実用化: 映像の非可逆圧縮において、より少ない符号量でより高い画質を得られるよう、映像一コマあたり数万個を超える膨大な符号化パラメータの全組み合わせを一コマはおろか映像全体にわたり最適調整することは不可能である。氏による「局所未定乗数最適化技術」は、映像全体でわずか3個のパラメータを調整することで最適化処理を従来の1,000倍以上高速化し、客観画質を1.0～1.9dB客観向上させ、符号量制御も一撃的に行える。さらにこれは符号化方式に依存しない汎用技術であり、ソフト/ハード、業務/民生、商用/非商用を問わず普遍的に用いられており、今後も必須たりうるものである。

普及活動: 氏は1998年より、MPEG国内委員としてMPEG-4、H.264/AVC、H.265/HEVCの標準化活動に参加し、2011年よりMPEGとJPEGを所掌するISO/IEC JTC 1/SC 29の日本代表(国際)および専門委員長(国内)として、H.265/HEVCも含む600以上の規格投票案件を調整し、適時かつ円滑な国際規格の制定に貢献をしたほか、実際の標準化担当者を講師に招いた一般向け技術解説セミナーを2014年より定期的に企画・開催している。また氏が共編著の「H.265/HEVC教科書」は広く技術者や学生に膾炙し規格の普及を強力に牽引しているほか、多くの標準技術講演・解説記事執筆・国際符号化コンペティション主宰などを通じ、映像符号化国際規格の制定と普及、技術向上に貢献をしている。

今日の映像通信は、高い基本性能を持ち標準化された圧縮技術と、その性能を発揮させる高度な符号化最適化技術の双方なくしては実現不可能である。同氏の双方への貢献は、今後ますます重要性が高まり、影響を与え続けるものである。

研究奨励賞



● 研究課題

「多層構造を有する高効率塗布型有機 EL 素子の開発」

相澤 直矢 氏

(理化学研究所 創発物性科学研究センター 創発超分子材料研究チーム 客員研究員)

〈研究概要〉 近年、印刷技術を用いて省エネルギーで製造できる塗布型有機ELが注目を集め、研究開発が盛んに行われている。将来的に新聞を印刷するように、有機ELディスプレイや照明を量産できると期待されている。塗布型有機ELの実用化の課題である発光効率の向上には、異なる有機物の薄膜を積層し、電荷輸送や発光といった機能を各層に分離することが有効である。しかし、上層を塗布積層する際に、塗布溶媒による下層の再溶解を防ぐ必要がある。

相澤氏は、高効率な塗布型有機ELデバイスの開発に取り組んでいる。これまでに、塗布による多積層構造を可能とする低分子有機EL材料の溶解性制御技術や高分子有機EL材料の短時間・低温架橋技術を提案し、市販の蛍光灯や無機LEDに匹敵する高い電力効率 88 lm/Wを示す塗布型白色有機 EL デバイスの開発に成功した。また、塗布により形成した積層膜の界面構造がデバイス効率に与える影響を検証し、発光層と電子輸送層の界面において、発光材料の溶出を抑制することが高効率化に重要であることを明らかにした。さらなる塗布型有機 ELの研究開発により、製造および駆動の両面で真に省エネルギーな光源を実現することで、喫緊のエネルギー問題の解決に貢献するものと期待できる。



● 研究課題

「コンピュータホログラフィによる超高分解能
4次元計測システム」

角江 崇 氏

(千葉大学 大学院工学研究院 助教)

〈研究概要〉 コンピュータホログラフィは、光の波動的性質(干渉と回折)を利用して、光強度と位相の両方をデジタルに記録・再生可能な技術である。計測対象へと光を照射し、その透過光または反射光の情報を、ホログラムと呼ばれる2次元の干渉縞画像としてイメージセンサで記録する。記録したホログラムに対して計算機上で再生処理計算を行うことで、計測対象の情報を有した光の強度分布と位相分布とを数値的に再生できる。コンピュータホログラフィにおいては、イメージセンサや光源の制約はないため、特殊なイメージセンサや光源を利用することで様々な計測法を実現可能である。

角江氏は、イメージセンサに偏光カメラ、光源に超短光パルスレーザーを導入することで、ナノメートルオーダの奥行き分解能とフェムト秒オーダの時間分解能とを同時に達成しうる、超高精度4次元(空間3次元+時間1次元)計測システムの実現に成功している。将来的には、光計測の持つ非侵襲性、非接触性を活かした、他技術では計測しえない未知の超高速現象や生命現象、生体細胞の働きの発見および解明への貢献を目指している。

研究奨励賞



● 研究課題

「ナノ薄膜干渉基板を用いたカビの蛍光増強 イメージング法の開発」

安田 充 氏

(関西学院大学 理工学部 研究特別任期制助教)

〈研究概要〉 近年、薬剤耐性を獲得したカビの世界的な感染流行 (パンデミック) が危惧されている。カビは生長しながら細胞組織へと侵入することで感染するため、生長の仕組みを明らかにすることが緊急の課題となっている。しかし、生長に重要な役割を果たすと推測される低濃度分子からの微弱な蛍光の観察には困難を伴う。この問題を打開するため、Ag基板上の透明なAl₂O₃誘電体膜からなるナノ薄膜干渉基板に着目した。ナノ薄膜干渉基板では一般的なスライドガラスなどの基板と比較し、蛍光物質からの蛍光が100倍以上増強する。ここでの増強は主に光学干渉によって基板表面に発生した増強電場により、蛍光物質の吸収係数や量子収率が増大し、電子から放出される蛍光の発光効率が向上することで起きる。

本研究では、ナノ薄膜干渉基板がもつこの高い蛍光増強効果をカビに適用し、蛍光染色したカビの蛍光増強イメージングを実証することで、カビの「明るい」蛍光観察基盤を確立することを目的とする。本研究課題の達成により、これまで見えなかった細胞内低濃度分子からの微弱な蛍光が観察できるようになるため、微生物学をはじめとする生物学や医学分野の発展に貢献することが期待される。また、ナノ薄膜干渉基板を使い捨て型チップとして用いれば、カビ感染の医療診断にも適用できる。さらに、社会的要請度の高い人類の生存を脅かすカビによるパンデミックを未然に防ぐことにも貢献するため、本研究が果たす役割は大きい。

研究奨励賞 研究成果論文

当財団では、研究奨励賞贈呈者に対して、受贈後の2年間での研究成果について報告をお願いしています。報告された研究成果論文は、当財団のホームページで公開いたします。

本年度は、2015年度贈呈者の研究成果論文をホームページに公開いたしました。

安在 大祐 氏 (名古屋工業大学 大学院工学研究科 情報工学専攻 助教)

● 研究課題 「インプラント医療通信における大容量画像伝送に関する研究」

久保 亮吾 氏 (慶應義塾大学 理工学部 電子工学科 専任講師)

● 研究課題 「ネットワーク制御システムにおける適応的QoS保証技術」

真部 雄介 氏 (千葉工業大学 情報科学部 准教授)

● 研究課題 「ユビキタスセンシング環境に基づく人物および行動認識に関する研究」

ホームページ

<https://takayanagi.or.jp> 研究奨励賞 をご参照ください。

科学放送高柳賞 最優秀賞

番組名 「パラリンピック・ドキュメンタリーシリーズ「WHO I AM」
森井大輝(日本/アルペンスキー)【平昌パラリンピック完全版】」

●放送局:株式会社WOWOW ●放送日:2018年5月4日(54分間)



WOWOWと国際パラリンピック委員会(IPC)が共同で立ち上げた大型スポーツドキュメンタリーシリーズ。

リオパラリンピックが開催された2016年から、東京パラリンピックが開催される2020年まで5年にわたり、世界最高峰のパラアスリートに迫る。

競技においてはもちろん、人生においても自信に満ちあふれ、「これが自分だ!」という輝きを放つ選手たちを描く。ナレーターを務めるのは、西島秀俊。

毎シーズン、世界中の8人のパラリンピックメダリストに密着し番組を制作・放送している中の、シーズン2唯一の日本選手としてパラアル

ペンスキー日本代表のエース、森井大輝(もりいたいき)に密着。

過去のパラリンピックでは3度の銀メダルに輝きながら、唯一手が届かなかった金メダルを目指した森井が、2018年3月に行なわれた運命の平昌パラリンピックに挑むまでの全軌跡。

科学放送高柳賞 優秀賞

番組名 「衝撃! 未来テクノロジー 2030年世界はこう変わる」

●放送局:株式会社BSテレビ東京 ●放送日:2017年10月29日(114分間)



日々進化を遂げる科学技術。我々の生活は将来、最先端技術によってどう変化していくのか? 番組ではモビリティ(交通)、医療、AI(人工知能)といった技術の研究開発の現場を米西海岸や日本国内で取材、2030年に我々の生活がどう変わるかを大胆に予測する。

モビリティ分野では、米西海岸で電気自動車テスラのCEOイーロン・マスク氏が主導する未来型交通網のコンテストをレポート。真空チューブの中を時速1200キロで疾走するという構想に夢を抱く慶応大学のチームにも密着取材した。そのほか実現が視野に入った「空飛ぶクルマ」の最新事情も紹介する。

医療では日本のベンチャー企業が挑む最先端の筋電義手や、体内を巡って病気を治すナノマシンを取材。米国で進む遺伝子レベルのがん診断の実情も報告する。iPS細胞でノーベル賞を受賞した山中伸弥・京大教授をインタビュー、2030年の医療の現場を予測する。

創造・芸術の世界まで視野に入り始めたAIの活用では、いずれ到来するといわれる「AIが人間を超えるシンギュラリティー(技術的特異点)」の時代を見据え議論した。

科学放送高柳賞 優秀賞

番組名 「NHKスペシャル シリーズ古代遺跡透視 大ピラミッド発見! 謎の巨大空間」

●放送局:日本放送協会 ●放送日:2017年11月4日(49分間)



4500年前に作られた世界最大、エジプト・クフ王の大ピラミッド。「人力だけで、どのようにして作られたのか」「クフ王のミイラは一体どこにあるのか」「古来より伝わる『秘密の部屋』は本当に存在するのか」など、今なお数多くの謎に包まれています。

その謎に挑むために注目したのが「ミュオン透視技術」。宇宙線ミュオンが物体をすり抜ける性質を使って、巨大構造物を透視する新技術です。NHKは2014年春から、福島原発事故の廃炉作業のために「ミュオン透視技術」を開発していた2つの研究機関(名古屋大学・高エネルギー加速器研究機構)と共同研究体制を作り、ピラミッドを透視するための技術開発を進めてきました。

この技術をエジプトの大ピラミッドの内部に持ち込み、2年がかりの透視調査を行った結果、大ピラミッド内部に、これまで全く知られていなかった「通路」のような空間や、200人乗りの旅客機に相当する驚きの巨大空間があることが明らかになりました。この成果は権威ある英国の科学雑誌「ネイチャー」電子版に掲載され、2日後にこのNHKスペシャルで発表されることとなりました。

■ 放送期間/2017年9月1日~2018年8月31日 ■ 応募放送局/9局 ■ 応募番組数/11番組

入賞番組の一般公開

本年度の入賞番組は、制作局の了解の上、公益財団法人放送番組センターが運営する、放送番組専門の公開施設「放送ライブラリー」において、後日、一般に無料で公開することにしております。

◆放送番組専門の公開施設「放送ライブラリー」のご案内

- 場 所 横浜情報文化センター 8F
神奈川県横浜市中区日本大通11 TEL.045-222-2828
(交通アクセス)みなとみらい線「日本大通り駅」3番出口(情報文化センター口)直結
JR根岸線・横浜市営地下鉄「関内駅」徒歩10分
- 開館時間 10時~17時 (視聴受付は、閉館30分前まで)
- 休 館 日 毎週月曜日(祝日・振替休日の場合は、次の平日)、年未年始

公益財団法人番組放送センターの「放送ライブラリー」は、放送法に基づく、わが国唯一の放送番組専門のアーカイブ施設であり、NHKと民放のテレビ、ラジオ番組とCMを公開しています。

詳細は、ホームページ <http://www.bpcj.or.jp/> をご参照ください。

歴代受賞一覧

高柳健次郎賞

研究奨励賞

科学放送高柳賞

■ 高柳健次郎賞・受賞者一覧

年度	氏名	受賞時の所属・職名	
2017年	須崎 渉	大阪電気通信大学	名誉教授
2016年	内田 龍男	東北大学	名誉教授
2015年	宮原 秀夫	大阪大学	元総長
2014年	大場 吉延	日本放送協会	元理事
2013年	白井 克彦	放送大学学園	理事長
2012年	安田 浩	東京電機大学 未来科学研究科	委員長・教授
2011年	泉 武博	日本放送協会 放送技術研究所	元所長
2010年	青木 利晴	株式会社NTTデータ	元社長
2009年	相磯 秀夫	東京工科大学	理事・前学長
2008年	金子 尚志	日本電気株式会社	名誉顧問
2007年	長谷川 豊明	日本放送協会	元専務理事・技師長
2006年	辻井 重男	情報セキュリティ大学院大学	学長
2005年	立川 敬二	独立行政法人 宇宙航空研究開発機構	理事長
2004年	安田 靖彦	早稲田大学 理工学部	教授
2003年	嵩 忠雄	大阪大学	名誉教授
2002年	中村 好郎	日本放送協会	元副会長
2001年	中原 恒雄	住友電気工業株式会社	特別技術顧問
2000年	長尾 真	京都大学	総長
1999年	林 宏三	日本放送協会 放送科学基礎研究所	元所長
1998年	熊谷 信昭	大阪大学	元総長
1997年	斎藤 成文	東京大学	名誉教授
1996年	藤尾 孝	大阪工業大学	客員教授
1995年	岩崎 俊一	東北工業大学	学長
1994年	野村 達治	日本放送協会	元専務理事・技師長
1993年	植之原 道行	日本電気株式会社	特別顧問
1992年	岡村 總吾	東京電機大学	学長
1991年	鈴木 桂二	長岡技術科学大学	名誉教授
1990年	宇都宮 敏男	東京理科大学 理工学部	教授
1989年	大島 信太郎	国際電信電話株式会社	元副社長
1988年	瀧 保夫	東京理科大学 基礎工学部	学部長
1987年	平山 博	早稲田大学 理工学部	教授
1986年	尾上 守夫	株式会社 リコー	専務取締役
1985年	坂井 利之	京都大学 工学部	教授
	樋渡 涓二	筑波大学 電子・情報系	教授

■ 財団設立からの累計受賞者35名(1985年度～2012年度 高柳記念賞)

■ 高柳健次郎業績賞・受賞者一覧

年度	氏名	受賞時の所属・職名	
2017年	藤田智成 星沢拓 石井紀彦	NTTソフトウェアイノベーションセンタ 分散処理基盤プロジェクト 日立製作所 研究開発グループ テクノロジーイノベーション統括本部 日本放送協会 放送技術研究所 新機能デバイス研究部	主任研究員 部長 上級研究員
2016年	稲見昌彦 島本彦洋	東京大学 先端科学技術研究センター 日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部	教授 上級研究員
2015年	柏野邦夫 西田幸博	日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所 日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部	上席特別研究員 上席研究員
2014年	田中祥次 松尾義博	日本放送協会 放送技術研究所 伝送システム研究部 日本電気株式会社 メディアインテリジェンス研究所	上級研究員 主幹研究員
2013年	松村欣司 高橋司敏	日本放送協会 放送技術研究所 日本電信電話株式会社 メディアインテリジェンス研究所	主任研究員 主席研究員
2012年	今井亨久 山田悦久	日本放送協会 技術局 計画部 三菱電機株式会社 情報技術総合研究所 映像情報処理技術部	副部長 主席技師長
2011年	川村龍太郎 角尾幸保	日本電信電話株式会社 未来ねっと研究所 日本電気株式会社 情報・メディアプロセッシング研究所	メディアイノベーション研究部長 主席研究員
2010年	岩館祐一 長沼次郎	日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部 NTTエレクトロニクス株式会社 デジタル映像事業本部	主任研究員 主事
2009年	藤井哲郎 白川千地	東京都市大学 環境情報学部 NTTスマートコネクタ株式会社 出光興産株式会社	教授 取締役 電子材料開発C
2008年	丸山裕孝 江藤剛治 中村淳一	日本放送協会 放送技術研究所 近畿大学 理工学部 アプティナ・ジャパン株式会社	主任研究員 教授 代表取締役
2007年	川添雄彦	日本電信電話株式会社 NTTサイバーソリューション研究所	主幹研究員
2006年	金澤勝	日本放送協会 放送技術研究所	主任研究員
2005年	八島由幸	日本電信電話株式会社 NTTサイバースペース研究所	主幹研究員
2004年	小池康博	慶應義塾大学 理工学部	教授
2003年	佐々木誠	日本放送協会 放送技術研究所	デジタルネットワーク部長
2002年	大塚作一	株式会社NTTデータ 技術開発本部	コンテンツ管理技術グループ・部長
2001年	榎啓一 松永真理 土井利忠	株式会社NTTドコモ iモード事業本部 松永真理事務所 ソニー株式会社	取締役 本部長 代表取締役 執行役員上席常務
2000年	加藤久和 村瀬和洋	日本放送協会 技術局開発センター 日本電信電話株式会社 コミュニケーション科学基礎研究所	チーフエンジニア メディア情報研究部 グリダー
1999年	松山駿介 中村修二	富士通日立プラズマディスプレイ株式会社 日亜化学工業株式会社	専務取締役 開発部 主幹研究員
1998年	小野定康 藤藤敬	日本電信電話株式会社 光ネットワークシステム研究所 キャノン株式会社 B製品事業本部	小野特別研究室 室長 常務取締役 本部長
1997年	篠原紘一 村上宏	松下電器産業株式会社 日本放送協会 放送技術研究所	AVC商品開発研究所 主担当 表示・光デバイス 部長
1996年	森健一章 寺田一章	株式会社東芝 オリンパス光学工業株式会社	常務取締役 取締役 第3事業部長
1995年	清水宏紀 野村武史	日本ビクター株式会社 TDK株式会社	取締役 ビデオ事業本部長 基礎材料研究所 部長
1994年	西脇秀則 鷲塚諫	三洋電機株式会社 ニューマテリアル研究所 シャープ株式会社 液晶事業本部	太陽電池研究室長 専務取締役 本部長
1993年	萩本和男 吉田真澄	日本電信電話株式会社 伝送システム研究所 株式会社富士通研究所 マルチメディア研究所	光通信研究部 主幹研究員 テクノロジー研究部門長付
1992年	谷岡健吉 土屋吉裕	日本放送協会 放送技術研究所 浜松ホトニクス株式会社 中央研究所	映像デバイス研究部主任研究員 所長代理
1991年	木目健治朗 藤原淑男	三菱電機株式会社 電子商品開発研究所 ソニー株式会社 ビジネス&プロフェッショナル開発本部	開発第3部 第4グループマネージャー 本部長
1990年	秋山郁男 藤原慎司	日本電気株式会社 映像開発本部 松下電器産業株式会社 情報機器研究所	第一開発部 課長 入力デバイス開発室長
1989年	江藤良純 大島正毅	株式会社日立製作所 中央研究所 工業技術院電子技術総合研究所	第5部 主管研究員 知能システム部 視覚情報研究室長
1988年	村上仁己 廣田昭	国際電信電話株式会社 上福岡研究所 日本ビクター株式会社	画像通信研究室長 取締役ビデオ研究所長
1987年	野村龍男 木戸出正継	日本放送協会 放送技術研究所 株式会社東芝 総合研究所	主任研究員 技術管理部 課長
1986年	安田浩二 熊田純二	日本電信電話株式会社 複合通信研究所 日本放送協会 放送技術研究所	画像通信方式研究室長 ハイビジョン研究開発グループ

■ 財団設立からの累計受賞者（59件）63名（1986年度～2012年度 高柳記念奨励賞）

研究奨励賞・受賞者一覧

年度	氏名	受賞時の所属先	年度	氏名	受賞時の所属先				
第34回 2017年	藤田 桂 英 平山 竜 士 森本 勝 大	東京農工大学 大学院工学研究科	第15回 1998年	横 矢 直 和 和田 智 志 深 見 正	奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科				
		千葉大学 大学院工学研究科			東京農工大学 工学部 応用化学科				
		富山大学 大学印理工学研究所			金沢工業大学 工学部 電気・電子系				
第33回 2016年	片 宗 優 貴 金子 健太郎 松 本 圭 介	九州工業大学 若手研究者フロンティアアカデミー	第14回 1997年	笹 尾 勤 鳥 養 映 子 浅 田 雅 洋	九州工業大学 情報工学部 電子情報工学科				
		京都大学 大学院工学研究科			山梨大学 工学部 電子情報工学科				
		愛媛大学 大学院理工学研究科			東京工業大学 工学部 電気電子工学科				
第32回 2015年	安 在 大 祐 久 保 亮 吾 真 部 雄 介	名古屋工業大学大学院 工学研究科	第13回 1996年	宮 崎 正 弘 白 井 肇 荒 川 薫	新潟大学 工学部 情報工学科				
		慶應義塾大学 理工学部 電子工学科			埼玉大学 工学部 機能材料工学科				
		千葉工業大学 情報科学部			明治大学 理工学部 情報科学科				
第31回 2014年	榎 本 洗 一 郎 片 山 昇 高 村 陽 太	新潟大学大学院 自然科学研究科	第12回 1995年	荒 川 泰 彦 山 本 節 夫 奥 村 次 徳 小 谷 一 孔	東京大学 生産技術研究所				
		東京理科大学 理工学部 電気電子情報工学科			山口大学 工学部 機能材料工学科				
		東京工業大学大学院 理工学研究科			東京都立大学 工学部				
第30回 2013年	安 井 隆 雄 周 大 江 西 祐 希	名古屋大学 工学研究科	第11回 1994年	武 藤 佳 恭 林 真 至 森 迫 昭 光 酒 井 士 郎	北陸先端科学技術大学院大学 情報科学研究科				
		早稲田大学大学院 情報生産システム研究科			慶應義塾大学 環境情報学部				
		金沢工業大学 光電相互変換デバイス研究開発センター			神戸大学 工学部 電気電子工学科				
第29回 2012年	延 兼 啓 純 田 中 一 晶 木 村 貴 幸	北海道大学大学院 理学研究院物理学部門	第10回 1993年	山 本 眞 司 若 林 真 一 田 中 國 昭 平 井 有 三	信州大学 工学部				
		大阪大学 工学研究科			徳島大学 工学部 電気電子工学科				
		日本工業大学 工学部 電気電子工学科			豊橋技術科学大学 工学部 知識情報工学系				
第28回 2011年	村 岡 貴 博 井 上 亮 文 鈴 木 健 仁	東北大学 多元物質科学研究所	第9回 1992年	蛭 原 健 治 篠 田 庄 司 田 坂 修 二 松 田 甚 一	広島大学 工学部 第二類 電気系				
		東京工科大学 コンピュータサイエンス学部			千葉大学 工学部 電気電子工学科				
		茨城大学 工学部 電気電子工学科			筑波大学 電子・情報工学系				
第27回 2010年	石 淵 久 生 山 口 実 靖 宮 崎 大 介	大阪府立大学 大学院工学研究科	第8回 1991年	新 井 宏 之 白 石 和 男 半 谷 精 一 郎 渡 辺 治	熊本大学 工学部 電子情報工学科				
		工学院大学 情報通信工学科			宇都宮大学 工学部 電気電子工学科				
		大阪市立大学 大学院工学研究科			東京理科大学 工学部 電気工学科				
第26回 2009年	長 谷 川 浩 海 老 原 聡 野 村 孝 徳	名古屋大学 大学院工学研究科	第7回 1990年	伊 藤 彰 義 岡 野 光 治 橘 邦 英 根 本 幾	東京大学 工学部 物理工学科				
		大阪電気通信大学 工学部			京都工芸繊維大学 工学部 電子情報工学科				
		和歌山大学 システム工学部 メカトロニクス学科			東京電機大学 理工学部				
第25回 2008年	水 柿 義 直 多 田 和 也 石 塚 洋 一	電気通信大学 電気通信学部	第6回 1989年	加 藤 誠 巳 小 松 尚 久 寅 市 和 男 三 橋 涉	上智大学 理工学部 電気・電子工学科				
		兵庫県立大学 大学院工学研究科			早稲田大学 理工学部 電子通信学科				
		長崎大学 工学部 電気電子工学科			筑波大学 電子・情報工学系				
第24回 2007年	谷 井 孝 至 白 谷 正 治 岡 野 好 伸	早稲田大学 理工学術院 基幹理工学部	第5回 1988年	浅 田 邦 博 吉 田 雄 二 小 柴 正 則 大 津 元 一	東京大学 工学部 電子工学科				
		九州大学 システム情報科学研究科			名古屋大学 工学部 情報工学科				
		武蔵工業大学 知識工学部 ネットワーク工学科			北海道大学 工学部 電子工学科				
第23回 2006年	渡 邊 慎 也	青山学院大学 理工学部 電気電子工学科	助手	第4回 1987年	美 濃 導 彦 白 鳥 則 郎 山 田 実 巖 笹 瀬 巖	京都大学 工学部 高度情報開発実験施設			
第22回 2005年	中 川 清 雅 磯 村 雅 夫	香川大学 工学部 信頼性情報システム工学科	教授			東北大学 工学部 電気通信研究所	金沢大学 工学部 電気情報工学科		
		東海大学 電子情報学部 電気電子工学科					慶應義塾大学 理工学部 電気電気工学科		
		第21回 2004年		棟 安 実 治 鶴 殿 治 彦	関西大学 工学部 電子工学科		第3回 1986年	小 長 井 誠 西 川 博 昭 大 西 公 平	東京工業大学 工学部 電気・電子工学科
茨城大学 工学部 電気電子工学科	大阪大学 工学部 電子工学科								
第20回 2003年	出 口 博 之 井 須 尚 紀		同志社大学 工学部 電子工学科		第2回 1985年	坂 内 正 夫 広 田 修 天 野 英 晴			東京大学 生産技術研究所
		三重大学 工学部	相模工業大学 情報工学科						
		第19回 2002年	六 車 仁 志 木 村 宏	芝浦工業大学 工学部 電子工学科			第1回 1984年	斎 藤 省 吾 榎 本 裕 之	九州大学 総合理工学研究科
岐阜大学 工学部 電気電子工学科	東京大学 生産技術研究所								
第18回 2001年	寺 内 衛 西 村 俊 和 入 江 聡 小 林 春 夫			広島市立大学 情報科学部 情報工学科	教授	助手			助手
		立命館大学 理工学部 情報学科	第17回 2000年	渡 邊 高 志 長 田 康 敬 岸 田 悟 岩 月 正 見			講師	助手	
		福井大学 工学部 材料開発工学科							
群馬大学 工学部 電気電子工学科	琉球大学 工学部 電気電子工学科	助教			専任講師				
第17回 2000年			大 森 裕 和 田 修 巳 山 田 功	大阪大学 大学院 工学研究科		助教	助手		
								第16回 1999年	岡山大学 工学部 電気電子工学科
	山形大学 工学部 電子情報工学科	法政大学 工学部 電気電子工学科			助教				

■ 財団設立からの累計受賞者（74大学109名）／累計助成金額 20,960万円（1984年度～2012年度 研究助成）

■ 科学放送高柳賞 受賞番組並びに放送局

(第28回～第43回 科学放送高柳記念賞／第44回科学放送 高柳健次郎賞)

回数/年度	受賞名	番組名	放送局名
48回 2017年	最優秀賞	「カムイの鳥の軌跡 ～オオジシギ2つの物語～」	北海道テレビ放送株式会社
	優秀賞	「ゴミノヒカリ～未来を照らすアルミゴミ発電～」	株式会社チューリップテレビ
	優秀賞	「村山齊の宇宙をめぐる大冒険」	日本放送協会
47回 2016年	最優秀賞	NHKスペシャル「ミラクルボディー 世界最強の人魚たち」	日本放送協会
	優秀賞	カンブリア宮殿 「世界が驚いた新素材革命!人口モ糸&石から作る“魔法の紙”」	株式会社テレビ東京
	優秀賞	「野生のいのち 死の連鎖」	北海道テレビ放送株式会社
46回 2015年	最優秀賞	SBS防災特別番組「富士山鳴動す-火の山の危機と予知-」	静岡放送株式会社
	優秀賞	「トキ 新世界を生きる」	株式会社新潟放送
	優秀賞	NHKスペシャル「腸内フローラ～解明!驚異の細菌パワー～」	日本放送協会
45回 2014年	最優秀賞	NHKスペシャル「アルツハイマー病をくい止める!」	日本放送協会
	優秀賞	テレビ東京系列「カンブリア宮殿”ノーベル賞御用達!”光の技術を極める超絶企業」	株式会社テレビ東京
	優秀賞	TOYAから明日へ!「氷の島のメッセージ」～グリーンランド温暖化の最前線から～	北海道テレビ放送株式会社
44回 2013年	高柳健次郎賞	未来世紀ジパング～”アルマ展望台”プロジェクト	株式会社テレビ東京
	奨励賞	NHKスペシャル「世界初撮影! 深海の巨大イカ」	日本放送協会
	奨励賞	生命38億年スペシャル・最新遺伝子ミステリー「人間とは何だ…!?」	株式会社TBSテレビ
43回 2012年	高柳記念賞	NHKスペシャル「宇宙の渚」第1集 謎の閃光 スプライト	日本放送協会
	奨励賞	KBSふるさとスペシャル「未来を回せ～富山発・小水力発電の可能性～」	北日本放送株式会社
	奨励賞	「風を集めて”レンズ風車”未来への挑戦」	RKB毎日放送株式会社
42回 2011年	高柳記念賞	「クニマスは生きていた!」	株式会社毎日放送
	奨励賞	コスミック フロント ～発見! 驚異の大宇宙～「迫りくる太陽の異変」	日本放送協会
	奨励賞	チャンネル4「三兄弟が挑んだ命の鼓動～国産初・植え込型補助人工心臓開発物語～」	株式会社テレビ信州
41回 2010年	高柳記念賞	「神の鳥からの警告」	富山テレビ放送株式会社
	奨励賞	NHKスペシャル「ハッブル宇宙望遠鏡 宇宙の始まりに挑む」	日本放送協会
	企画賞	「人類よ 宇宙人になれ 立花隆VS小学生」	日本放送協会
40回 2009年	企画賞	「ノンフィクションW」街が踊る!ビルが笑う!デジタルサイネージで変わる世界	株式会社WOWOW
	高柳記念賞	「クエスト～探求者たち～宇宙エレベーターで宇宙へ! 青木義男教授の挑戦」	株式会社WOWOW
	奨励賞	「富山湾・あいの海」	富山テレビ放送株式会社
	奨励賞	NHKスペシャル「病の起源 第4集 読字障害～文字が生んだ病～」	日本放送協会
39回 2008年	企画賞	「ニッポンの恐竜はどこから来たのか」	福井放送株式会社
	高柳記念賞	素敵な宇宙船地球号「世界遺産の光と影 Vol.9～屋久島のいのちの森～」	株式会社テレビ朝日
	奨励賞	「めんたいキッズ08～こどもたちが番組作りに挑戦～」	株式会社福岡放送
	奨励賞	NHKスペシャル「眠れる再生力をよびませ～脳梗塞・心筋梗塞治療への挑戦～」	日本放送協会
38回 2007年	企画賞	「探Qサイエンス」	株式会社テレビ西日本
	高柳記念賞	NHKスペシャル「赤ちゃん 成長の不思議な道のり」	日本放送協会
	奨励賞	「因島造船物語 撓鉄と生きる人々」	株式会社テレビ新広島
	奨励賞	「豊かな干潟～坂田明が見た豊前海の神秘～」	大分朝日放送株式会社
37回 2006年	企画賞	素敵な宇宙船地球号「CO2スリム大作戦」	株式会社テレビ朝日
	高柳記念賞	「カナリヤの子供たち～検証・化学物質過敏症～」	日本テレビ放送網株式会社
	奨励賞	ガイアの夜明け「最先端! オーダーメイド医療～あなただけの治療法選びます～」	株式会社テレビ東京
	奨励賞	「SBSスペシャル 秋津の岸辺」	静岡放送株式会社
企画賞	素敵な宇宙船地球号 シリーズ ミクロの生命体「微生物ハンターが人類を救う」	株式会社テレビ朝日	

回数/年度	高柳記念賞	高柳記念奨励賞	高柳記念企画賞
36回 2005年	中京テレビ放送株式会社 番組名 「感染症の世紀～ウイルスハンター～人類の終わりにさき闘い」	北海道テレビ放送株式会社 株式会社テレビ東京	日本放送協会
35回 2004年	日本放送協会 番組名 地球ふしぎ大自然「幻想! 夜に草原が輝く ブラジル光るアリ塚の謎」	北陸放送株式会社 テレビ愛知株式会社	株式会社TBSテレビ
34回 2003年	テレビ愛知株式会社 番組名 「よみがえれ三河湾!～スナメリのいる海～」	株式会社テレビ東京	株式会社テレビ朝日

第33回2001年以前の受賞番組・放送局は、ホームページ(<https://takayanagi.or.jp>) 科学放送高柳賞をご参照ください。

■ 第1回～第27回 科学放送振興協会 主催 (うち、第16回～第27回 高柳記念財団 後援)/ 第28回～ 高柳記念財団・高柳健次郎財団 主催

■ 役員名簿

理事	末松 安晴 (非常勤)	理事長 東京工業大学栄誉教授
	羽鳥 光俊 (非常勤)	東京大学名誉教授 国立情報学研究所名誉教授
	松崎 淳嗣 (非常勤)	株式会社国際技術顧問事務所 代表取締役
	児野 昭彦 (非常勤)	日本放送協会 専務理事・技師長
	篠原 弘道 (非常勤)	日本電信電話株式会社 取締役会長
	古屋 一仁 (非常勤)	東京工業高等専門学校名誉教授
	坂井 勝則 (非常勤)	専務理事
	鶴田 雅彦 (常勤)	事務局長
評議員	下邨 昭三 (非常勤)	元科学技術庁 事務次官
	相磯 秀夫 (非常勤)	東京工科大学 理事・名誉教授 慶應義塾大学名誉教授
	餌取 章男 (非常勤)	科学ジャーナリスト
	藤本 正熙 (非常勤)	一般社団法人日本オーディオ協会 顧問
	井上 勇三 (非常勤)	株式会社東京放送ホールディングス 社長室顧問
	吉野 武彦 (非常勤)	元日本放送協会 専務理事・技師長
	桂 靖雄 (非常勤)	パナソニック株式会社 客員・元代表取締役副社長
	寺崎 明 (非常勤)	一般財団法人 情報通信振興会 理事長
監事	飛田 和男 (非常勤)	元株式会社ネクストジェン 常勤監査役
	森川征治郎 (非常勤)	税理士

■ 委員名簿

〈選考委員会〉

- ・電子科学技術の分野で独創的な研究に取り組む若い研究者への研究奨励賞の選考
- ・電子科学技術の分野で優れた研究業績により、科学技術並びに産業の発展に貢献された方々の功績に対する高柳健次郎賞・同業績賞の選考

委員長	羽鳥 光俊	東京大学名誉教授 国立情報学研究所名誉教授
委員	後藤 敏	早稲田大学 名誉教授 エジプト日本科学技術大学 副学長
	荒井 滋久	東京工業大学 科学技術創成研究院 未来産業技術研究所 教授
	三谷 公二	日本放送協会 放送技術研究所 所長
	川村龍太郎	日本電信電話株式会社 サービスイノベーション総合研究所 所長

〈審査委員会〉

国内の放送局でテレビ放映された優れた科学放送番組に対する科学放送高柳賞(最優秀賞・優秀賞)の審査

委員長	餌取 章男	科学ジャーナリスト
副委員長	松崎 淳嗣	株式会社国際技術顧問事務所 代表取締役
副委員長	奥野花代子	神奈川県立生命の星・地球博物館 名誉館員
委員	相生 啓子	特定非営利法人日本国際湿地保全連合 顧問
	青木 恒夫	元日本ビクター株式会社 コーポレートコミュニケーション部長
	榎並 和雅	国立大学法人東京工業大学 監事(常勤)
	竹中 一夫	スカパーJSAT株式会社 顧問
	所 眞理雄	株式会社オープンシステムサイエンス研究所 代表取締役
	並木 康臣	元日本ビクター株式会社 理事・技術本部技術戦略部長
	元村有希子	株式会社毎日新聞社 科学環境部長
	由利 伸子	有限会社サイテック・コミュニケーションズ 代表取締役

公益財団法人 高柳健次郎財団

〒102-0082 東京都千代田区一番町4番地5 ニューライフ一番町309

TEL: 03-3239-1207 FAX: 03-3262-3028

E-mail: tkinenz@oak.ocn.ne.jp

<https://takayanagi.or.jp>

Kenjiro Takayanagi Foundation

4-5-309, Ichiban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0082 Japan

Tel: +81-3-3239-1207 Fax: +81-3-3262-3028